

原 著

身体的拘束最小化に向けた認知症ケア —抑制帯代替としての「認知症マフ」活用の検討—

赤坂 慶子, 三澤奈々子

秋田労災病院看護部

(2025年8月25日受付)

要旨：背景と目的：身体的拘束は原則違法行為であり，虐待に該当し患者の心身に与える影響が大きい。本研究は認知症マフ（以下，マフ）の活用が，カテーテル類の自己抜去予防に与える影響を明らかにし，身体的拘束の代替として有効か検証することを目的とした。

対象：認知症高齢者の日常生活自立度の評価がIII以上でカテーテル類の留置を伴う治療を受ける患者。

調査期間：2023年7月～10月。

方法：カテーテル類の留置期間中，患者にマフを使用し看護師による観察調査を1日3回（13時，20時，7時）行った。調査項目は①日本語版ニーチャム混乱・錯乱状態スケール（以下JNS）の評価，②マフ使用時の患者の反応，③カテーテル類の自己抜去の有無，④上肢抑制帯・ミトンの使用の有無とした。

結果：対象者はA～Dの4名（男性1名，女性3名）であった。年齢は 84.7 ± 0.6 歳（平均±標準偏差）であった。JNS平均点はA：12.86点，B：12.69点，C：23.27点，D：20.08点であった。JNSの合計点の推移をみると，入院時のJNSが「中等度～重度」であった対象A，Bでは，時間経過とともに点数が上昇した。入院時のJNSが「軽度または発生初期」であった対象C，Dでは，低下傾向を示した。抑制帯による上肢の身体的拘束を一時的に実施したのはBのみだった。対象者4名中3名がマフに興味を示した。カテーテル類の自己抜去は発生しなかった。

結論：マフの活用は身体的拘束の代替として有効であることが示唆された。マフの活用は，認知症高齢者と看護師の相互安心感へとつながる副次的効果をもたらす可能性がある。

(日職災医誌, 74: 43-47, 2026)

—キーワード—

認知症マフ, 身体拘束, 代替, カテーテル

1. 背景・目的

身体的拘束は原則，違法行為であり緊急やむを得ない場合を除き，虐待に該当する。玉山らは，整形外科疾患をもつ高齢者に対する身体的拘束開始の判断要件のひとつとして，点滴・ドレーン類の自己抜去¹⁾を報告している。

当病棟は整形外科と歯科口腔外科の50床の一般急性期病棟で，入院患者の65歳以上の割合は約7割，看護体制は10対1である。2021年4月から2022年4月までの1年間で点滴自己抜去によるインシデントは26件であり，そのうち厚生労働省が定めた「認知症高齢者の日常生活自立度判定基準」自立度III（日常生活に支障をきたすような症状・行動や意思疎通の困難さが見られ，介護

を必要とする）以上の患者の割合は50%だった。いずれも点滴自己抜去を予防するためにミトンや抑制帯等の身体的拘束が実施されていた。当看護部では，カテーテル類を留置している患者に対し，身体的拘束の代替として，点滴刺入部を包帯で保護する，点滴ルートやドレーン，膀胱留置カテーテルを襟元やズボンの裾から出し注意が向かないようにする等の工夫が行われている。しかし，このような工夫をしてもカテーテル類の自己抜去が発生してしまうため，緊急でやむを得ないことを理由に身体的拘束を行う傾向がみられる。

一方，認知症マフ（以下マフ）は，英国で生まれた認知症高齢者ケアのためのtwiddle muff（手でいじる筒状防寒具）のことで，認知症の人の落ち着かない手を穏やかに温かく保ち，触覚や視覚という感覚を用いたケア実

践に活用されている²⁾。そこで、我々はカテーテル類を留置している中等度認知症患者に対しマフを導入し、マフが上肢の動きを抑制する身体的拘束の代替として有効かを検証した。

2. 研究方法

1) 対象

認知症高齢者の日常生活自立度の評価が III 以上で、入院後点滴ルート、創部ドレーン、膀胱留置カテーテル（以下カテーテル類）の留置を伴う治療を始める患者。

除外基準としてマフを口に入れるなど異食の危険があると判断される場合は、中止とすることを決められた。

2) 調査期間：2023年7月から10月まで。

3) 方法

対象患者に対して、カテーテル類の留置期間中、日勤帯（13時）、準夜帯（20時）、深夜帯（7時）の3回看護師による行動観察を行った。観察項目は①日本語版ニーチャム混乱・錯乱状態スケール³⁾（以下 JNS）での評価、②マフ使用時の患者の反応、③カテーテル類の自己抜去の有無、④上肢抑制帯・ミトンの使用の有無の4項目とした。

JNS は、対象ごとに合計点を算出し時系列で散布図を作成、近似曲線で混乱の程度を可視化した。JNS 合計点の評価は表1に示す。マフへの反応や自己抜去の有無からその有効性について検討した。マフは朝日新聞厚生文化事業団「認知症マフを作ろう！」²⁾のホームページを参考に看護部が自主制作した。

3. 倫理的配慮

対象者及び家族に研究の目的、内容と研究方法について説明し、同意書を交わした。研究への参加は自由であること、研究の参加に同意した場合であっても途中でやめることができること、研究の参加の有無により不利益を被ることはないこと、論文発表の際には個人が特定されないように表記し、収集したデータ等は研究終了後直ちに破棄する等のプライバシーや個人情報の保護についての説明も行った。本研究は、秋田労災病院の倫理委員会にて承認（受付番号 5-7）を得た。

4. 結果

調査期間中、認知症高齢者の日常生活自立度の評価が III 以上の患者は7名、そのうちカテーテル類の使用の対象者は4名であった。4名とも緊急入院で急激な環境の変化のもと、入院当日からカテーテル類が留置となった。年齢は、 84.7 ± 0.6 歳（平均 \pm 標準偏差）、男性1名、女性3名であった。対象者の入院病名、使用カテーテル、治療方針は表2に示す。

マフ使用中の JNS の平均点は、A 氏（85 歳）は 12.86 点、B 氏（84 歳）は 12.69 点で点数は継時的に増加した。

表1 ニーチャム混乱・錯乱スケール（JNS）評価

合計点	評価
0～19点	中等度から重度の混乱・錯乱状態
20～24点	軽度又は発生初期の混乱・錯乱状態
25～26点	「混乱・錯乱していない」がその危険性が高い
27～30点	「混乱・錯乱していない」正常な機能の状態

（図1、2）一方、C 氏（85 歳）、D 氏（85 歳）の平均点は 23.27 点、20.08 点で点数は継時的に減少した（図3、4）。マフへの反応に関しては、4名とも常にマフに触っていることはなかったが、手に持たせると笑顔がみられ、常にマフを傍らに置きマフに対し不快な反応を示さなかった。身体的拘束の実施では、B 氏のみ点滴ルートに触れる行為が頻繁に見られたため、点滴実施中の数時間片側の上肢にミトンが使用された。4名とも自己抜去によるインシデント発生はなかった（表3）。

5. 考察

今回の対象者4名は、疾患による疼痛と緊急入院による急激な環境変化を有しており、全員が心身ともに不安定な状況にあったと推察する。A 氏と B 氏は、入院時の JNS で「中等度から重度の混乱・錯乱状態」と評価された。2名とも骨折を有しており、手術治療を要する強い疼痛がベースにあったことが JNS 点数の低かった一因と考えられたが、手術による疼痛消失などが混乱・錯乱状態の改善につながり JNS 点数が時間的経過によって増加したと思われる。一方、C 氏と D 氏は、入院時には「軽度または発生初期の混乱・錯乱状態」の評価であったが入院後の JNS 点数も減少した。2氏とも保存的治療のため早期離床への対応に限界があり、混乱・錯乱状態の改善には至らなかった。

今回の検討では、マフを使用した4名とも少なくとも JNS 点数の明らかな悪化を認めなかった。マフ使用には認知症高齢者の落ち着いた手を穏やかに温かく保ち、触覚や視覚に働きかけることで環境の変化による不安や恐怖を軽減させる可能性がある。山口は、触れることが及ぼす生体への作用について、快適な感覚刺激は脳のオキシトシンの分泌を促し、癒しやストレスの軽減効果をもたらすと述べている。今回、混乱・錯乱状態がより重度の A 氏と B 氏に JNS 点数の著明な改善傾向がみられたのは、手術治療による疼痛の緩和とマフの癒しやストレス軽減効果の相乗効果と推察する。

身体的拘束は、1名にミトンを使用した数時間の実施に留まった。今回4名ともカテーテル類の自己抜去のインシデント発生はなく、マフの使用は上肢抑制帯やミトン装着の代替となりうる可能性が示唆された。今回の研究から、マフは身体的拘束がカテーテル類の自己抜去予防の第一選択であるとする従来の看護介入の概念を変

表2 対象患者の内訳

患者	A	B	C	D
年代	85	84	85	85
性別	女性	女性	女性	男性
入院病名	左上腕骨骨折	左大腿骨骨折	仙骨骨折	脱水症
認知症高齢者自立度	自立度 III	自立度 III	自立度 III	自立度 III
認知症診断	認知症	アルツハイマー型認知症	認知症 パーキンソン病	なし
使用カテーテル	点滴ルート	点滴ルート 膀胱留置カテーテル	膀胱留置カテーテル	点滴ルート
入院形態	緊急入院	緊急入院	緊急入院	緊急入院
治療方針	手術治療	手術治療	保存的治療	保存的治療

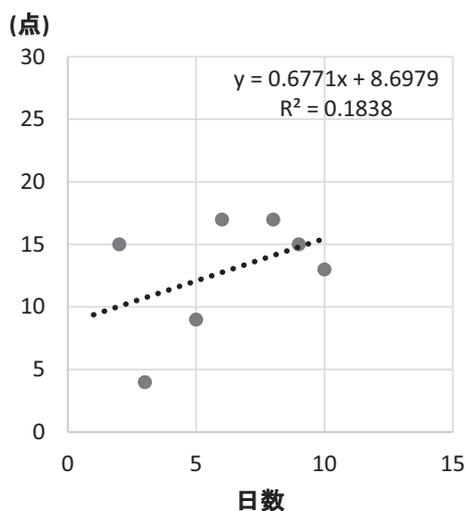


図1 JNS合計点の推移 患者A

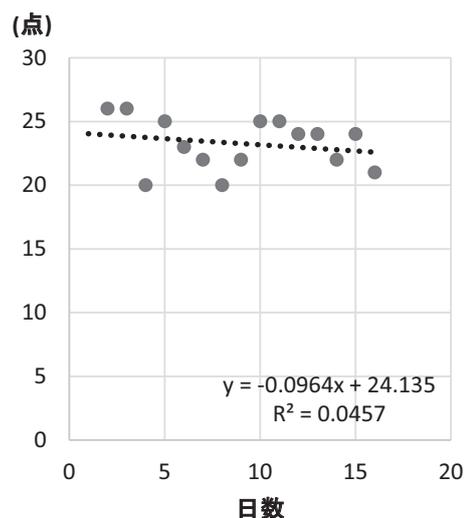


図3 JNS合計点の推移 患者C

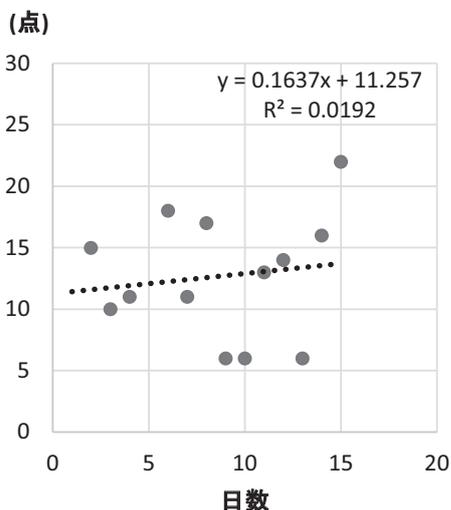


図2 JNS合計点の推移 患者B

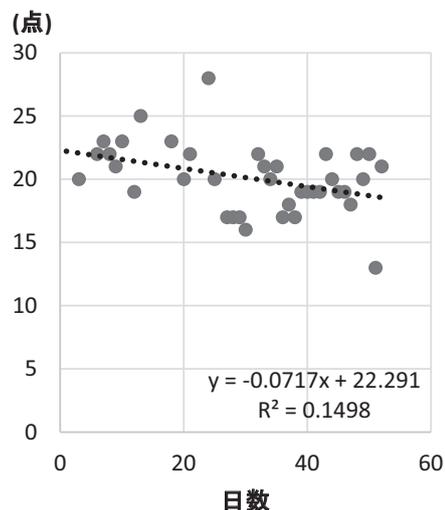


図4 JNS合計点の推移 患者D

え得る可能性が示された。

マフを導入したことのもう一つの利点として、患者のマフへの反応などを確認するための看護師の患者への声かけと接触の機会が増えたこと、マフを手にした患者の笑顔で看護師自身も笑顔になり相互の安心感へとつながるなどの副次的効果が生まれた。

鈴木らは、Twiddle muff の活用によって認知症高齢者の苦痛緩和だけでなく、関わるスタッフ自身も認知症の理解やコミュニケーションの促進の効果を感じていた⁵⁾と述べている。

本研究は、認知症高齢者を対象にマフを活用し、その効果を検証することを目的としたが、マフは患者への効

表3 観察結果の概要

患者	A	B	C	D
JNS入院時(点)	15	15	26	20
JNS最高値(点)	17	22	26	28
JNS推移平均 ±標準偏差(点)	12.9±4.4	12.7±5.0	23.6±2.3	20.1±2.2
JNSの評価	中等度～重度	中等度～重度	軽度又は初期	軽度又は初期
マフへの反応	声かけてマフに 触れる機会が増えた	マフを見て笑顔あ り手の届くところに マフを置く	枕元に置いて 時々触れる	「あったかくていい」 と笑顔になる
身体拘束	なし	ミトン	なし	なし
カテーテル抜去	なし	なし	なし	なし

果だけでなく、看護師の基本的な関わり方にも影響を及ぼし、認知症高齢者の不安や恐怖を和らげる大きな要因になることを再認識する機会となった。

6. 結 論

マフの活用は、認知症高齢者の身体的拘束の代替として有効性が示唆された。

マフの活用は、認知症高齢者と看護師の相互安心感へとつながる副次的効果をもたらす可能性がある。

7. 研究の限界

本研究は症例数4件を対象に行った。対象者の様子は日本語版ニーチャム混乱・錯乱状態スケールを用いて評価をしたが、マフへの反応に関しては看護師の主観的評価だけにとどまってしまった。今後は、対象者を増やしマフへの反応を客観的評価する等、結果の信頼性と妥当性を高めていくことが必要と考える。また、バイアスとして、今回の調査・マフ使用の観察等で、患者と看護師とのふれあいが増えた可能性は否めない。

[COI開示] 本論文に関して開示すべきCOI状態はない

文 献

- 1) 玉山清美, 小野美喜: 整形外科疾患をもつ高齢者に対する身体抑制開始時の判断要件. 日本看護倫理学会誌 9 (1): 31—37, 2017.
- 2) 朝日新聞厚生文化事業団: 認知症マフを作ろう!. <http://twiddlemuff.jp/>, (参照 2022-4-1).
- 3) 綿貫成明, 酒井郁子, 竹内登美子, 他: 日本語版 NEECHAM 混乱・錯乱状態スケールの開発およびせん妄のアセスメント. 臨床看護研究の進歩 12: 46—63, 2001.
- 4) 山口 創: 皮膚感覚と脳. 日本東洋医学系物理療法学会誌 42 (2): 9—16, 2017.
- 5) 鈴木みずえ, 内藤智義, 富樫千代美, 他: ミトン装着低減を目的に Twiddle muff を活用したスタッフの主観的効果と安全性の検討. 日本老年医学学会誌 60 (4): 414—423, 2023.

別刷請求先 〒018-5604 秋田県大館市軽井沢字下岱 30
秋田労災病院看護部
赤坂 慶子

Reprint request:

Keiko Akasaka
Department of Nursing, Akita Rosai Hospital, 30, Shimotai,
Karuzawa, Odate City, Akita Prefecture, 018-5604, Japan

Care for Dementia Aiming the Minimum Physical Restraint —Consideration of the Use of “Dementia Muffs” as an Alternative to Restraint Belts—

Keiko Akasaka and Nanako Misawa
Department of Nursing, Akita Rosai Hospital

Background and Objectives: Physical restraint is illegal in principle, corresponds to abuse, and has a significant impact on the patient’s mind and body. This study aimed to clarify the impact of using a “dementia muff” (muff) on preventing self-removal of catheters, and to verify whether it is effective as an alternative to physical restraint.

Patients sampling: Elderly dementia patients with a daily living independence rating of 3rd or higher who are undergoing treatment involving the placement of a catheter.

Survey period: July to October 2023.

Methods: When catheters were placed in patients, nurses conducted observation surveys three times a day (13:00, 20:00 PM, and 7:00 AM) using a “muff.” Survey items included 1) evaluation of the Japanese version of the Neecham Confusion Scale (JNS), 2) the patient’s reaction when using the “muff,” 3) whether the patient removed the catheter themselves, and 4) whether an upper limb restraint belt or mittens were used for the patient.

Results: The subjects were 4 patients, A to D (1 male, 3 females). The mean age (mean \pm standard deviation) was 84.7 ± 0.6 years. The average JNS scores were A: 12.86 points, B: 12.69 points, C: 23.27 points, and D: 20.08 points, respectively. The change of the total JNS scores, A and B, whose JNS scores at the time of admission were “moderate to severe,” showed an increase in scores over time. C and D, whose JNS scores at the time of admission were “mild or in the early stages,” showed a tendency to decrease. B temporarily needed a restraining belt of the upper limb. Three of the 4 patients showed an interest in the “muff.” There were no events of self-removal of catheters.

Conclusion: The current result suggests that the use of the “muff” is an effective alternative to physical restraints. The use of the muff also has the secondary effect of fostering a mutual sense of reassurance between elderly patients with dementia and nurses.

(JJOMT, 74: 43—47, 2026)

—Key words—

dementia muff, physical restraint, alternative, catheter